

第2回「宮城県みどりの食料システム戦略推進ビジョン」に関する懇話会 議事録

1 日時 令和5年1月31日（火）

午前10時00分から正午まで

2 場所 宮城県行政庁舎10階 農政部会議室

3 出席者

（懇話会構成員）

及川一也 構成員，近江一仁 構成員，尾形和利 構成員，佐々木ゆかり 構成員，千葉卓也 構成員，中村聡 構成員（座長）

（事務局）

伊藤紳 農政部技監兼副部長（技術担当），常陸孝一 農政部農業政策室長，叶光博 農政部農業政策室室長補佐兼企画員（班長），大槻恵太 農政部農業政策室企画員

（欠席者）

なし

5 議事

- ・ 会議の公開・非公開について
- ・ 宮城県みどりの食料システム戦略推進ビジョン（中間案）について
- ・ 意見交換

6 配布資料

- ・ 次第
- ・ 「宮城県みどりの食料システム戦略推進ビジョン」に関する懇話会開催要綱
- ・ 「宮城県みどりの食料システム戦略推進ビジョン」に関する懇話会構成員名簿
- ・ 資料1 会議の公開・非公開について
- ・ 資料2 宮城県みどりの食料システム戦略推進ビジョン（中間案）
本県の農林水産業・食品産業が2030年に目指す姿
- ・ 資料3 宮城県みどりの食料システム戦略推進ビジョン（中間案）
目標達成に向けた主な施策（概要）
- ・ 冊子 宮城県みどりの食料システム戦略推進ビジョン（中間案）

7 概要

(1) 開会

農政部農業政策室叶室長補佐が開会を告げた。

(2) 挨拶

農政部伊藤技監兼副部長（技術担当）があいさつを行った。

(3) 構成員及び事務局紹介

農政部農業政策室叶室長補佐より、構成員及び事務局の紹介を行った。

(4) 議事

同要綱第4第2項の規定により、第1回懇話会に引き続き、中村座長が議事進行を行った。

① 会議の公開・非公開について

農政部農業政策室常陸室長より、資料1に基づき説明が行われ、会議を公開することで決定した。

② 宮城県みどりの食料システム戦略推進ビジョン（中間案）について

農政部農業政策室大槻企画員より、資料2・3に基づき説明が行われた。

③ 意見交換

【中村座長】

事務局からの説明を踏まえまして、委員の皆様から2点、ご意見を伺いたいと思います。1点目は農林水産業、食品産業が2030年に目指す姿と、2点目は目標達成に向けた主な施策です。各分野のお立場から7分程度でお伺いしたいと思います。事務局への確認事項等がありましたら、併せてお願いします。始めに生産分野の千葉委員からお願いします。

【千葉委員】

調達、生産についてお聞きしたいです。資料3の調達のところ、海産物から出るリサイクル可能なものがあるのであれば、海産物から出る資源の有効活用も検討いただければより良いと思います。世界情勢も含めて肥料が高いので、肥料の開発等もお考えいただき、県全体の資源をフル活用するような取組を目指していただきたいです。生産は有機JAS認証から離れている生産者が多いと感じています。私もほうれん草で県の認証を取得していますが、販売先から理解が得られていない状況です。今の相場観で1袋あたり10～20円しか高く売れないので、そこに手間をかけて高く売れる状況を作っていくのは大変難しいのかと感じています。有機農産物プラスアルファとしてGAPも取り入れていきな

がら、検討いただきたいです。また、取引先からGAPを取得している生産者を探しているという声が増えてきているのが実際です。第三者認証も視野に入れながら、GAPも将来像に盛り込んでいただくことで世界が広がっていくと思います。あと、スマート農業を展開していく上で、ほ場整備が必要ではないかと。機械が自動化していくうえで平野部ではほ場は広いが山間部では規模が小さいということで機械を導入してもコスト削減につなげるためには、ほ場整備が必要だと思っているので、その辺も踏まえていただければと思っています。以上となります。

【中村座長】

ありがとうございます。GAPの認証は結構求められている状況ですか。

【千葉委員】

バイヤーは探している状況なので、将来像や具体的取組に入れていただきたいです。残留農薬検査や硝酸態窒素の濃度など、作物にどれくらい残っているか重要になってくるので、有機農業をするにしても、そういったものを減らしていくのも一つの方向性と思っています。

【中村座長】

科学的に安全性が求められている状況を踏まえると、そういった考え方も重要ということですね。ありがとうございました。続いて、同じく生産分野の尾形委員からお願いします。

【尾形委員】

調達の部分について、畜産農家は堆肥がたくさんあって大変だ、だれか持って行ってくれないかという話はしていますが、耕種農家は堆肥は欲しいが・・・という状況。堆肥散布機や運搬のダンプがないので堆肥の活用が進まない状況です。これらの支援だけでも、堆肥の利用量は増えると思っています。飼料作物ですが、畜産農家はバンバン作って国産を使いたいという声が聞こえますが、機械や乾燥機の導入が必要で、とうもろこしは機械へのダメージが大きいという声も聞かれますので、それに対する機械導入の支援が手厚くあれば良いのではないかと思います。生産に関しては、スマート農業について、ドローンでセンシングして可変施肥や害虫の発生部分への農薬散布など、県内7か所にRTK基地局ができ、説明会がバンバン入ってきているので、これから増えるのではと感じています。ただし、当社はブルーインパルス飛行エリアが近いので、随時調整して行っていますが、周辺環境には配慮する必要があると思います。

【中村座長】

ありがとうございました。堆肥に関しては散布機や運搬などの意見をいただきました。とうもろこしの乾燥機の負担についてご意見がありましたが、出荷に係る水分調整等の影

響でしょうか。

【尾形委員】

コンバインの消耗があると聞いています。カントリーエレベータのようなどころに出荷できる形ができれば、生産者は作りやすいと思います。

【中村座長】

それでは、次にスマート農業分野の及川委員をお願いします。

【及川委員】

資料2ですが、持続的生産体制の中に省力化、安定化、環境負荷低減を両立させる記載がなされていることは高く評価できると感じています。宮城県は県内7か所に高精度な位置情報を発信できるRTK基地局が整備されるので、スマート農業の取組に向けた環境が整備されることはビジョンの実現に対して大きく前進すると思っています。データを活用したデータ駆動型農業をどのように取り組んでいくかを、さらに盛り込むと、デジタル技術を取り入れた農業の変革（DX）の意識づけが進むと感じています。病虫害の診断などでAI技術の応用が進んでいますので、これが可変施肥や精密農業に紐づけられると、ユーザーがより簡単に活用できるようになると思います。データ駆動型農業でひとつキーになるのは営農支援システムであり、基幹的な営農のクラウド型データベースになりますが、最近ではGAPの認証や、継続において、実施を認証できるようになってきています。スマート農業と一言でいいますが、多面的な農業の変革の効果が期待されます。

資料3ですが、温室効果ガスの削減量について、農業の温室効果ガス削減の中でメタンについては、水田からの排出が一番多いです。表現の話になりますが、水田における適正な中干しに、水田におけるメタン排出量を削減するという内容を加えると良いと思います。また、水稲から畑作への転換という表現がありますが、宮城県は全国に誇る水田輪作の先進県、2年3作によって水田を高度に利用していると思います。作付転換とするのが良いか、水田輪作とするのが良いか、表現を検討されると良いと思います。当社でも農業のグリーン化に資する取り組みを進めることとしていますが、農業機械の燃費向上、燃料燃焼の効率化や電動化も検討しています。また、有機物施用ですが、カーボンニュートラルとまでは行かないまでも、堆肥、緑肥等の利用を推進し、宮県の特徴を生かした取組が重要かと思います。

【中村座長】

ありがとうございました。資料2の自動操舵等の目標値ですが、現状の21経営体から10倍以上の値となっています。この辺の実現の可能性はどうでしょうか。

【及川委員】

自動操舵システム自体については、使用できる経営体は経営規模が大きいところが中心

になってきます。KPIの設定については宮城県が育成を目指す大規模経営体の数と、ある程度、整合性をとっていただければと思います。自動操舵システム等となっていますので、等の中にデータ駆動型農業を入れていただければ、250経営体は十分実現可能かと思えます。

【中村座長】

RTK基地局が整備されてスマート農業が拡大していくということですが、データ駆動型農業も併せて拡大を図っていく必要があるということでした。ありがとうございました。続いて流通事業者の分野から近江委員をお願いします。

【近江委員】

市場はお客さんが2種類ありまして、農作物を持ってきていただく生産者の方と、買っていただく卸、消費者の方がいます。市場の役割はヒト、モノ、お金、情報を一つに集めて、取引が行うことができる場所ということが定義かと思えます。業界の動向等ですが、地元の施設園芸の法人さんから、市場の食物残さの量について問い合わせがありました。理由を聞いたところ、おそらく温熱利用だと思えますが、生産残さと一緒にエネルギーに変えて、ハウスの暖房に利用できないか検討をしているというお話でした。また地元の議員さんが議会の答弁利用のため、同じような質問がありました。みどりの食料システム戦略にみんな絡んでおり、様々な角度から取り組んでいるのだなと感じました。最近では庄内の広域行政の方が石巻市場に見学に来られまして、環境に関することを熱心に聞かれておりました。石巻市場では年間221トンの生ごみが出ています。年間の取り扱いが約6万5千トンなので、3%くらいが生ごみになっています。返品ごみもありますが、最近多いのは事故品です。産地から市場に来た段階で商品が劣化しているため、廃棄せざるを得ないものです。天候の厳しさが影響しているのではないかと思います。生産者サイドからも環境に向けた取組が行われているのだなということがまず1点。あと消費側、先ほどGAPのお話がありましたが、大手コンビニチェーンのお弁当に入っている原料のプロセスセンターといって、そこへ原料供給しています。来年度、納品する商品を最低JGAP対応にしてくれという要請が来ています。現段階でも一部GAP商品を納入しているということで、我々もGAP商品を探しています。大手コンビニチェーン店さんはGAP商品に魅力を感じているというより、私見ですが、管理された農産物を取り扱いたいということだと思います。最近では、一般量販店もPB商品を作る際にGAP以上の認証をマストとしますということもありました。有機JASは農林水産省の認証、みやぎの環境にやさしい認証制度は宮城県の認証、JGAP等は民間認証、生産者の方がどのように選ぶのか、なかなかわかりづらいので、提案といいますか、フォローする範囲が異なると思いますが、互換性がある部分については認め合う方向に行った方がコストが下がると思えます。また、前回の懇話会でもお話ししましたが、コストと手間が価格転嫁できるか、価格転嫁された商品が売れるかどうかという問題になります。ブームを広げるのは大切かと思えますので、ブームを広げる活動をやってほしいと思えます。一番わかりやすく簡単ということが広まりやすいです。シ

チェーンマスクットが最近では増えていると思いますが、理由は作りやすいからです。取り組みやすいことを強めていく方向性が良いと思います。また、いかに低コストで仕上げるかということも大切だと思います。様々なものが値上がりしていますので、生産者の方も多少の手間なら頑張れるけど、コストまでは吸収できないということが本音だと思います。そういった部分もご配慮いただければと思います。

【中村座長】

ありがとうございます。資料2で有機JASについて知っている県内消費者の割合を70%まで上げるという目標がありますが、ご意見があればお願いします。

【近江委員】

前回もお話ししましたが、現在の店舗での取り扱いが青果物の中で1%未満が現状ですので、遠い数字かと思いますが、選ばれない理由を解決していった方が早いと思います。多分コストと手間だと思いますが、その割に高く売れないということを解決する必要があると思います。あとGAPをマストとするという量販店やコンビニが出てきた以上、この流れは加速していくと思いますので、その流れに乗る方法、乗りやすい方法を模索していくべきだと思います。

【中村座長】

ありがとうございました。続きまして小売事業者の分野から、佐々木委員をお願いします。

【佐々木委員】

資料2、3を合わせた形で、感想を言わせていただきます。宮城県でこれまでどんな取組が行われてきたのか、どんな状況なのかということが、すごくわかりやすかったと思います。様々な取組、様々な方向からのアプローチがわかりました。資料2について、目標値を数値で出しているのなので、誰にでもわかりやすく、共有しやすいものだと思います。稲わらや家畜排せつ物など、通常であれば温室効果ガスを発生させるようなマイナスのイメージのものに対して、逆に有効活用していくのだというスタンスが、宮城県の自然豊かなものを活用するという点で良いと思いました。このビジョンの中に書くのは難しいかもしれませんが、関係者の共創によるということですが、最終的には生産者、消費者みんなの利益になるということがわかるのですが、最初の一步は踏み出しにくいと思います。生産者から見れば取り組むメリットはどこにあるのか、資料2、3だけでは見えにくいのではないかと思います。よく読めば、農薬や肥料を使用しないことでコストダウンはできますよ、でも収穫量はダウンになってしまうのでは、そのために技術開発や支援などを展開していく、安定した経営につなげていくとビジョン本体には記載されていますが、資料2、3はそこが伝わらないかなと思います。最初の一步が大事と感じました。環境負荷の見える化の部分ですが、生産と消費は両輪と思っています。生産者が環境に配慮

して生産しても、消費者が十分理解できていない状況です。私たちは今まで、商品供給に際し、何らかの形で社会貢献したいという消費者の方々へ働きかけを行ってきましたが、宮城県さんも同じだと思いますが、今までと同じアプローチで良いのか。組合員さんに集まっていたく時、どうしても高齢の方が多くなります。県のバスツアーなどもお子さんというより、高齢の方が多いのではないでしょうか。アプローチする層をガラッと変えてしまうもの手かと思います。小学生や中学生にターゲットを絞るということも、2050年を見据えれば必要かなと思います。子供が動くところには、親が必ずついてきますので、ターゲットを絞り切るのも良いかなと思います。それと、水産物の活用が少ないかと思えます。宮城県は水産物がとても多く獲れるところですので、水産も巻き込むことで活動が広がっていくのではと思います。温室効果ガスの排出量はとても大切ですが、先ほどカーボンオフセット制度の話がありましたが、宮城県でグリーンカーボンを推進すること、宮城県らしい山も海もあって、ビジョンにもっと宮城らしさを出てくるのではと思ひながら資料を拝読しました。以上です。

【中村座長】

ありがとうございました。生産者のメリットや不安解消になるような情報が記載されればより良いということでした。最後に私から、第2回ということで、紙面が限られている中で、うまくまとめられているのかなと思います。宮城県は食材王国ということで、農産物も海産物もすべてそろっているのはあまりないですし、廃棄物を堆肥化してミネラルを補給していく、多様な資源をさらに使えるような形にさせていただけると良いのではと思います。私の方からは以上となります。

皆様から様々なご意見をいただきました。ビジョンをより実効性のあるものとするため、全体で何かあればお知らせ願います。調達、生産、流通・加工、消費の中で、生産は多様な取組が検討されていますが、流通・加工、消費がネックといますか、一体的な取組にしていく上で重要かと思えます。流通・加工、消費の部分でさらにご意見がございましたらお願いします。先ほど、佐々木委員からターゲットへのアプローチのお話がありましたが、大崎に「あ・ら・伊達な道の駅」がありまして、全国有数の売り上げということで、SNSなどを駆使して情報発信をされているので、そういったところも参考にしながら、アプローチも必要ではないかと思いました。

【及川委員】

分野は異なりますが、中村先生より、若者へどう伝えるかというご意見がありました。宮城県は農業大学校など教育環境が整っていますので、例えば、環境負荷の少ない農法とJクレジットを併用したカーボンニュートラルな食材を給食に加えたり、学生・生徒に考えてもらったりするなど、教育との連携は必要かと思えます。環境に配慮した農業に取り組む農業者と、学生・生徒の連携を強化するのが良いと思ひます。

【中村座長】

ありがとうございました。2050年に向けて次の世代を中心に考えるというか、そこへのアプローチは重要かと思います。

【近江委員】

学校給食などへの食材について、環境負荷低減に資するものを積極的に使っていただければと思います。米が余っているのであれば、毎日米を食べさせれば良いのではという単純な疑問が市場でたまに出ます。こういった取組、安全で環境にやさしい取組をしているのに、なぜ学校給食に使用してくれないのか。優先的に使用しますといった誘導をしていただくと、子供たちが食べるわけですから、当然食育につながりますし、いずれ親になり、子供に食べさせるようになります。環境にやさしい農産物と普通の農産物であれば、どちらを買うか妻に聞いてみましたが、値段が同じならお墨付きがあるものを買う、値段が異なる場合は安い方を買うということでした。日本の慣行の農産物は非常に素晴らしい。震災の時にありましたが、体に悪いという情報、放射能の関係で悪いという情報の払しょくにわれわれは非常に苦労しました。もしかしたらという部分がなければ、平時の時は、慣行の農産物を選んだって悪くない印象があります。そのような認識もあると思うので、公共的な部分から率先的に使っていただきたいと思います。

【中村座長】

先ほどGAPのお話もありましたが、消費者のGAPに対しての意識は現場でどうでしょうか。

【近江委員】

直接消費者の方々と交わる場面は少ないですが、値段が同じなら環境にやさしい農産物を買うという状況ではないでしょうか。コンビニチェーン向けの食材は様々な制約があります。異物や農薬が仮に混入している場合、回収義務などペナルティがものすごく大きい。そのリスクは出ないようにするのが流通業者の責任だと思いますので、管理された農産物を欲しがるのは当然かと思います。いかにこの波に乗るのかということだと思います。

【伊藤技監】

学校給食についてですが、県産食材の利用について、給食センターは午前中に調理して昼までに学校へ届けられないといけないということと、泥がついた野菜を持ち込まれると大変ということでHACCPの関係もあります。下処理をしたものを前日や当日の早朝にもらえなければだめだということで、下処理業者が鹿島台にあります。規模が小さくてまだまだ追いついていないということがあります。下処理業者を県内に増やしていくことがまず必要な状況です。

【近江委員】

有機JASは小分け認証が必要とされたりしますよね。民間認証に比べてハードルが高いと思います。費用はだいぶ削減の方向で進んでいるなと思いますが、付帯する煩雑さは取組をしづらくしている側面かと思います。

【及川委員】

関連ですが、温室効果ガスの見える化ということで、簡易算定シートについてご紹介いただきましたが、教育と組み合わせるのは良いアイデアではないか、みどり戦略に係る取組と教育を連携させることは非常に有効ではないかと思います。GAPについてですが、例えばドローンで防除した結果がクラウド型のデータシステムに自動で記録されます。また、温室効果ガスであるメタンの排出抑制に向けて自動で水田の水管理を行えば、水管理の履歴が残るということで、消費者へきちんと伝えられる。今まで見えなかったものがきちんと示すことができることも活用できるのではと思います。

【中村座長】

サプライチェーンや環境負荷低減に着目した県産品の商品づくりですが、環境負荷低減に資する商品開発数の年間目標数は25とのこと。こういったところについても何かあればお願いします。

【大槻企画員】

お聞きしても良いでしょうか。生協さんですと角田や丸森の生産者限定の牛乳を販売されていると思います。環境負荷低減に取り組む生産者の方の牛乳を商品化されていると思いますが、そういった商品に対する消費者の声があれば教えていただきたい。

【佐々木委員】

消費者の声を寄せてくださる方はコアな方なので、良いことが聞こえてきます。牛乳の味は変わらないかもしれませんが、そこに角田、丸森に生産者が4軒しかなくて、環境負荷低減に取り組んで・・・ということ。私どもは牛乳だけではないですが、石巻青果さんにもご協力いただきながら、商品についての学習の機会を年間50回くらいでやっているのを続けており、結果的に商品をおいしく感じていただき、継続的にご利用いただいている。ご自身が何かに貢献したいという思いに対して、私たちはお手伝いしています。

【大槻企画員】

商品づくりについて、小売店側のご負担や必要な支援があれば教えていただきたい。

【佐々木委員】

利益率はNB商品と比較して薄いです。地域貢献のためとして、このような活動を広めていきたいし、非営利団体でもありますので、続けていきたいと思っています。

【近江委員】

民間が岐路に立つのは理念と利益が相反したときかなと思います。

【中村座長】

産業廃棄物の動向について、情報がわかるとより良いかと思います。企業が連携してくず野菜をチップにして販売するなどの取組もあるようです。こういった取組が展開されるような情報発信などをお願いしたいと思います。

【近江委員】

県外の例ですが、農業用マルチをマッチングしたことがあります。捨てるのはお金がかかりますが、ビニール袋を製造する業者さんがマルチを欲しいということでした。原油が高いので活用したいとのことで、茨城県の業者と取り組んだことがあります。あと海産物利用の話も出ましたが、私は30年位前に、環境にやさしい農産物の県認証を取得したことがあります。石巻市内での取組でしたので、当時、生産者さんはカキ殻を使用していました。また、万石浦で藻が大量発生し、捨てるためにコストがかかるので、肥料として使う検討をしました。有田のみかん農家の方が興味を持って、地元のJFとのマッチングでやろうとしたことがあります。輸送コストが高くなってしまい、高い資材を使用した方がコストが安くなるということも見られました。捨てるものでも資源になるものはたくさんあると思います。石巻市場で出る年間221トンの廃棄物は、処理に年間283万円かかっています。これらを肥料に変えてくれたらものすごくうれしいですね。

【中村座長】

他に何かありますでしょうか。

【千葉委員】

認証制度について、取得している理由について情報提供が必要ではないかと思います。認証制度取得にあたって、私は農協出荷を行っていましたが、プール計算になるということで、当社が出荷すると、トマト、ほうれん草が安くなるということがきっかけで、販路を分けようということで、農協に頼んで別売りにしてくださいと頼んだことが始まりです。結局高く売ろうということではなくて、差別化をしたかったということです。プール計算ですと市場価格の平均で価格が下がっていきますので、部会からちょっと離れて、別売りで販路を考えたときに、認証を活用したということになります。そのポジションによって取得の仕方が異なるのではと思ったので、どのような気持ちで取得に至ったか、思いをPRしても良いと思います。コストがかかったり収穫量が減ったりするので、やはり価値をしっかりとつけないと広がらないと思います。あとは普及センターの指導ですね。海外から新しい天敵などが入ってきておりますので、研究情報を出してもらって、普及していただければ、ある程度の農薬低減が進むと思います。オランダなどは天敵がうまく活用されておりまして、天敵が活用されれば化学農薬の低減が見込まれますので、認証制度より

も、まずは栽培技術の確立が必要かと思います。農薬を散布により、生産者がリスクを負っているので、天敵など新技術の情報がつながってくれば良い方向に行くのではと思います。

【中村座長】

県の方で総合防除の技術研究もされているようなので、現場への普及をしていただければと思います。

【及川委員】

ビジョン中間案のP5ですが、農林水産業の温室効果ガスについて、他産業との比較として、農業が排出している比率も誤解が無いように理解してもらうことも大切かと思います。日本の産業別グラフがあっても良いかと思います。

【中村座長】

GAP関係ですが、さまざまなGAPがありますが、国ではグローバルGAPを進めていくということですが、それに関していかがでしょうか。

【及川委員】

グローバルGAPはハードルが高いのですが、生産管理がしっかりしている法人であれば取り組みできると思います。山形県さんの基本計画では、コアは有機農業、その周りにGAPや各県の環境にやさしい認証制度への取り組みを位置づけるような整理をしています。しっかりと生産管理された農産物への取組がまず必要であろうと思います。

【近江委員】

輸出を考えられている方は免許証のようなものなので、ぜひ取り組まれた方が良いと思います。りんごの生産地は良い商品をほぼ輸出しています。りんごを1個1000円で買うことができる層の割合を1%だとすれば、人口比で中国はすごいことになります。日本の果物は芸術品だと。安全、安心でおいしい。高くても売れる。最近は円安で輸送品の高騰もありますので、日本に船が入る回数も減っています。船いっぱいにならないと輸送コストがかさむので、船をいっぱいにしています。輸入品も食べられない、国内の良い商品も食べられないとなると、食べるものが無くなってしまう不安があります。将来的に国内の生産量が減少したときに、GAPや有機JASなど言っていられなくなる時代がくるかもしれないという危惧はあります。ものすごく心配です。

【千葉委員】

グローバルGAPだと、輸出するところは取った方が良いと思いますが、そこまで経費かけて、国内で売るならやらなくても良いかなと思います。加工品になると国によって規制が変わってきます。トマトジュースを作っていますが、ふたのパッキン部分がフランスで

は環境ホルモンの関係で規制されているということで、輸出に際しては各国の規制に合わせる必要もあると思います。ほうれん草も硝酸性の高いものは海外では出荷できないということもありますので、環境に配慮した肥料設計も必要かと思います。畑に残っている肥料分の有効活用も肥料の低減につながるのではないかと思います。

【中村座長】

ハウス内のクリーニングクロープとして緑肥作物を栽培し、有機物として還元できるので、緑肥の活用も重要なと思います。ビジョンの実現に向けて、次の世代へのアプローチというお話もありました。宮城大学の食産業学群の学生に作物を育てる実習がありますが、有機質資材を使った栽培などの学生の取組も始めようと思っています。学生に聞くと特別栽培農産物やその仕組みをほとんど知らないという状況ですので、教育に取り組んでいきたいと思っています。それでは時間となりましたので、事務局にお返しします。次回は本日の内容を踏まえましてビジョンの最終案へご意見をいただきたいと思っています。

(6) 閉会

農政部農業政策室叶室長補佐が閉会を告げた。